

夜 い え
来 ら い
香 しゃん
て



中国短編小説集 一
て



春秋社発行
て

変わりっ狐

変わりっ狐

明朝^{みんちょう}の時代は二十年も前に終わり、北方^{ほっぽう}の女真族^{じょしんぞく}が天下を平定した。彼らは国を「清」^{しん}と改め、漢人達の土地を蹂躪し、彼らが数百年かけて作ってきた決まりを壊したのだった。

しかし世の時勢が大きく変化しても、小桃^{しょうとう}達のやっていることは依然として変わらなかった。

小桃は一人で水辺に立ち、顔を伸ばして水面にうつる己の顔をのぞき込んだ。

一目見るなり、彼女は地団太を踏んだ。

「どうしてうまくいかないの！」

水面にあったのは、あばただらけの醜い顔だ。肌は乾いたような感じで水気が無いし、眉も唇も形が整っていない。小桃は空しくこうべを垂れた。他の仲間は思うまま絶世の佳人へ変わることが出来るのに、彼女はどうしたって醜女になってしまうのだ。

小さなため息を漏らし、小桃はうんと背伸びをした。途端にしゅるりと体が縮み、もとの姿に戻っている。

その時、背後から野太い声が飛んできた。

「また失敗したようだのう」

草むらからのっそり、大きな狐が出てきた。この山西^{さんせい}・白馬山^{はくばさん}一帯を束ねる長佑^{ちょうゆう}様だ。みんなは彼の立派な姿、そして一族で誰よりも長生きしているのを理由に大爺様^{おおやさま}と呼んでいる。

小桃は黄色の頬を真っ赤に染めた。

「大爺様。あたし、何度やっても駄目なんです」

「駄目なものは駄目なものさ。お前は狐の姿でいる方が美しいね」

雪みたく白い足先、つややかな毛並み、ふわふわとした尻尾。確かに狐の小桃は、仲間内の雌達では一番綺麗なのだった。しかし彼女はかぶりを振った。

「こんな美しさなんか、何にもならないもの。綺麗な人間の女になれなきゃ、誰も仲間に入れてくれないわ」

「そりゃみんな、お前の美しさに嫉妬しとるんだろう。だからうまく変身出来ないことをあげつらって、お前を虐めてるのさ。そんな連中は放っておおき。お前はそのままの姿だって、好いてくれる雄がいるじゃないか」

小桃は頭と尻尾を激しく振った。

「やだっ。だって雌達の間じゃ、昔から人間の男を惚れさせるのが一人前の証なんだもん。人間の男から精を貰えば、長生き出来るし強い子供も産まれるのよ」

長佑は呆れ顔になった。

「お前な、あれは迷信じゃて。人間の男を捕まえるのはな、唐の時代に一匹の雌がいたずらで始めたことなんじゃよ」

「そんなの嘘っ。私のお母ちゃんは小さい時は病気がちだったけど、人間の男に精を貰ったから丈夫なあたしが産まれたんだって言ってたもん！」

「やれやれだなあ。お前みたいな跳ねっ返りは、わしのようなじじいの言うことなんぞ聞いちゃくれん」

またしても草むらがざわめいた。

小さい煩妹

はんまい
小さい煩妹

どうしてだかみんな、煩妹の誕生日を忘れていたようだった。

何で？ 煩妹は丸い瞳をぱちくりさせた。一番目の兄ちゃんも、二番目の兄ちゃんも、三番目の兄ちゃんも、みんな誕生日というものがあって、農家の家では滅多に食べられないお豆腐が食べれるのに、どうして煩妹の時だけは違うんだろう。

煩妹が誕生日のことを知ったのは、つい最近だった。優しい大祖父ちゃん——大祖父ちゃんというのは、お祖父ちゃんのお父さんで、もう八十になるのだ——がある日、今年いくつになるのか彼女に聞いてきたのだ。煩妹は最初、その意味がよくわからなかった。これまで自分の年齢を数えることも、数えてもらうこともしてこなかった。煩妹は母さんに聞いた。あたし、いくつなの？

そしたら、どういうわけか拳固が返ってきた。ついで母さんが怒鳴った。お前って子は、歳なんか聞いてどういう魂胆なんだい。何か貰えとでも思ったのかい？

煩妹は泣いた。それでまた殴られた。彼女の家では、泣くのは悪い子なのだ。でも兄ちゃん達が泣いていると、母さんは時々懐に息子を抱いて、優しく慰めることがある。どうして？ でも、それは聞いちゃいけないことだった。彼女はまだ幼く、よくわからないことが多かったから、大人達にこうだと言われたら、そうなんだと頷くしかないのだ。やがて、煩妹の無く声を聞いた大祖父ちゃんがすつとんできて、母さんを怒鳴った。家では大祖父ちゃんが一番偉い。母さんは不機嫌そうに、煩妹は来月の暮れに七歳になりますよ、とだけ言った。

つまり煩妹は今、六歳だ。母さんの剣幕が怖くて、もう誕生日のことを聞く勇気は無かった。

それでも、拳固で打たれた痛みが日に日にやわらいでくると、恐れもまた遠い思い出のようになった。すると煩妹は、再び自分の誕生日が気になり始めた。お豆腐が食べたくてしかたなかったのだ。あのつやつやして、水っぽいにおいがして、口の中で柔らかくほぐれていきそうな食べ物、どうしても欲しかった。

煩妹は待った。毎日、長椅子で死んだように眠っている大祖父ちゃんのところへ行って、今日が何日か聞いた。すると大祖父ちゃんもよく心得ているみたいで、お前の誕生日まであと十日だよ、といったふうに答えてくれるのだ。

明日が誕生日だよ、とある日に大祖父ちゃんがそう言ってくれたので、煩妹はいよいよ嬉しくなった。やっとお豆腐が食べれるのだと、そう信じていた。

でもいざその日が来ると、どうしてだかみんな、煩妹の誕生日を忘れていたようだった。

口琴（ハーモニカ）

ハーモニカ
口琴

また、途中で止まった。^{テイアンユアン}丁安遠は眉をひそめた。しばし耳を澄ませていたが、その口琴が再び音を奏で始めることはついで無かった。

^{ハンコウ}漢口へ引っ越してきて、はや半月が経つ。安遠は、^{ワン}王という帽子屋の男の家の間借りして暮らしていた。

口琴が完全に沈黙したのがわかると、彼は今朝の新聞に目を戻した。紙面は、まだ記憶に新しい^{ペイピン}北平における学生運動の話題で占められている。

それは彼が漢口に逃げてきた理由の、もっともたるものでもあった。中国に対し横暴を極める日本への運動は、いよいよ激しさを増していた。ことに華北ではそれが著しい。それまで声をひそめているだけだった人々が集まり、高らかに訴え、とうとう積極的な行動まで起こすようになったのはつい最近のことだ。特に若者達は、国のためにその熱い血潮を燃やしていた。

だが二十一歳の安遠は、彼らの勢いについていけなかった。臆病風に吹かれたわけではない。日本人は憎い。命を投げ出す覚悟もある。

彼はただ、運動に明るい展望を見いだすことが出来なかったのだ。希望や気力に溢れている他の若者達と比べると、彼は少々老成していたらしい。激化する運動は、むしろ日本の侵攻という病を助長させ、さらに悪い結果へと国を導くのではないか。その危惧が彼を争いから遠ざけ、ここ漢口へと足を運ばせたのだ。

そしてこの地に来て以来、毎朝きまって聞こえてくる口琴の音色が、彼の興味を惹きつけているのだった。

彼は今日までに、二つの奇妙な点に気がついていて、第一に、いつも曲の途中で演奏が終わってしまう。第二に、周囲の隣人達が口琴の吹き手についてその一切を話したがるという事だった。部屋を貸してくれている王にも何度か質問をぶつけたが、まるで相手にしてくれない。安遠自身、まだここへ来て日が浅く、白刃を踏むような危険は冒しなくなかった。それでも、毎日口琴の音色が耳元に届くと、どうにも心が落ち着かないのだった。

とある日、仕事――安遠は王の店を手伝う以外に、近場の書店で働いていた――から帰る道すがら、一人の女性を見かけた。年は二十四、五くらいか。色白で形の良い眉と唇、立ち振る舞いに上品な雰囲気が漂っている。小柄だが、しゃんと背を伸ばして歩く姿は、彼の目には魅力的にうつつた。両腕で抱えている紙袋は中身が一杯に詰まり、口からはパンの先がはみ出している。

ぼんやり女性を眺めていた安遠だったが、不意に驚きで目を見張った。彼女の入っていった家が、例の口琴の音色の出所だったのだ。